

明日帰ろうかと言っていたところ、弟たちと会って南熊本まで行き、砥用行き汽車に乗って帰りました。家にはたくさんの方が迎えに来ていました。

昭和二十四年十一月四日の夕方でした。七年十カ月で家に着きました。

私こと、無学の上、脳卒中後の事で、文がよく書けないところがたくさんあるかと思いますが、何とぞその点はご了承下さい。

無 題

埼玉県 山口 秀夫

私は、昭和十九（一九四四）年の春に補充兵として召集されました。第三乙種、第二補充ということで、本当に貧弱な体だったものですから、軍隊に行くなんていうことは全然夢にも思っていなかったんですが、それが突然召集令状が来まして軍隊へ行かなきゃならない。それが工兵という、土方ですね。穴を掘ったり重いものを持ったり、そういう兵種の工兵という隊に入隊させられました。

その召集令状が来たときに、私は当時大連に住んでおりました、大連の兵事部に召集令状を持って行ったんですが、その兵事部に担当の准尉がおりました、あなたたちは教育召集だから三カ月軍隊で辛抱してこい、三カ月すれば帰れるからということで、それならしようがないなと思って軍隊

へ入ったんです。そのときの兵事部の話で、今回は秘密召集だからだれにも言わなくていい。そんなことを言われたって……。親兄弟にも言うな、友人にも言っちゃいかん、ただ勤めている会社にはちゃんと話しておかないとだめだから会社にはいい、そのほかの者には絶対言うなと言われてまして、そんなことを言っちゃって、それこそ黙って出ていったら行方不明で大騒ぎになると思います。日本の当時の軍隊は何を考えているのか、ばかかなことを言うなと腹の中では思っていました。出発前は、私もお国のために殊勝な気持ちで大連神社にお参りして、立派に軍務に精励できるようにとお祈りしてお願いしました。我ながら立派な心がけだったとその当時は思っていました。

さて、初年兵の軍隊生活は毎日が重労働で、土方そのものでした。戦車壕掘り、重材料運搬、それから木工、大工の仕事ですね。そういう演習が毎日、架橋、漕舟。漕舟といたって、鉄の舟です。鉄の舟を四つつないでこぐ漕舟、その舟を

こぐんですが、これがもう重たい舟なので、それは大変な目に遭いました。

それで、大体三カ月、初年兵の訓練を終えまして検閲があるんですが、その検閲のときに体重が四十二キロまで下がりました。そのような苦勞をして心身ともに非常に鍛えられたので、後で考えると、あの長い抑留、つらい抑留生活も乗り切れたのだと、かえって感謝しております。もしもあの召集が遅くて、昭和二十年あたり、終戦前ぐらいに兵隊に入ってソ連に抑留されておいたら、とても生きては帰れなかっただろうと今でも思っております。だから、軍隊に入ったということは、かえって感謝しております。

それで、入隊のときに全部営庭に集められて、軍服あるいは軍靴、そういうものが支給になったんですが、私に支給された軍靴は、片一方が十文七分、片一方が十一文のバラバラの靴でして、ぶかぶかでもうにも履けないんです。それで班長に話して、十文三分の靴はないかと言ったら、工兵

にそんな小さな靴はない。歩兵にでも行けばあるかもしれないけれども、工兵ではそんな小さな靴はないんだ。靴を合わすんじゃないに、靴に足を合わせるんだ、そう言って、結局ずつと検閲が終わるまで、そのぶかぶかの靴で過ごしました。

話は飛びますが、ソ連に入りまして、昭和二十一年の三月までウオロシーフ、今のウスリースクというところの近郊におりまして、この間は町の近くなので、食糧も雑穀や黒パンがそこその分量、配給になりまして、そんなにひもじいという思い——ひもじいのはひもじかったんですが、まあまあ何とか配給になっておりましたので……。

ところが、そのうち収容所、そのころは石造りの天井の高い家で、そこにアンペラを敷いて生活しておりました。ソ連の警戒兵の話では馬小屋であったとのことでした。でも、それは石造りなので結構よかったです。作業は雑役で、家の修理で、壁塗りや屋根ふき等でした。だから、そのころの作業はまあまあ何とかそんなにひどいと

も思わなかったんです。やがてその収容所から少々離れたところに、同じウオロシーフの近郊なんです。がゼムリヤンカで土の穴を掘って、その上に屋根をかけて、半地下の住宅ですね。そういう収容所に入りました。そこに、一つの家には五十人から六十人ぐらいでしょうか、入っておりますが、作業も今度は石造りの家を建てるということになりました。これは相当大きな建物だったんですが、軍の営舎、軍隊の宿舎であるとのことでした。現場のすぐ後ろの方に山がありまして、そこから石を切り出してきて、その石をもつて現場まで運んで石造りの家を造っていったんです。

その外壁がだんだん高くなると、今度は足場をつくりまして、どんどん高いところにまた石を持ち上げていかなければならぬので、大変な作業でした。石を積む人たちは経験者とか、あるいは器用な人がその仕事をやっておりましたが、私なんかは何の経験もないので、もつこで石を運ぶ仕事に従事しておりました。これはもう相当な重労働で

した。

食糧も以前より悪くなって、朝はコウリヤンの雑炊と、昼は黒パンが配給になるんです。朝食を終えて、その黒パンを持って昼食のかわりにするんですが、量が少ないものですから、朝食が配給になったら昼の食事と一緒に食べてしまつて、昼はもう何にもないわけです。それで水を飲んで我慢しておりました。

朝はまだ暗いうちから起きて食事をするんですが、時計がないので炊事の者は、これは日本の兵隊なんです、炊事の者が星の位置を見て起床をかけるわけです。ところが時々間違つて、朝の二時や三時に起こされて、なかなか明るくならないので食事をしてからまた一寝入りするというようなこともたびたびありました。

また、半地下の家はゼムリヤンカと言うんですが、狭くて、真ん中に通路があつて、その両側に丸太を組んでそこを寝床にしていたんですが、夜中に小用に立って帰ってきたら、もう狭いのです。

き間がないんです。それで重なつてその上にどかんと寝て、無理やり押し込んで寝るといふ状態でした。

その後、道路工事をする事になり、野宿の旅が続きました。道路工事というのは、その工事は既成の道路らしきものがあるところに、その横に一メートル幅の六十センチぐらいの側溝、溝を掘つて、真ん中をかまぼこ型にして、その上に砂利を敷く。その砂利は、幸いなことに道路の横をちよつと掘ると、もう五、六十センチから一メートル掘ると砂利層がありまして、その砂利を掘つてきては上に乗つけるわけです。その砂利を十センチぐらいの厚さに乗せて、このノルマがたしか一人一日、道路の長さで四メートルぐらいだったと思ひます。

このように普通の硬さの道路でしたらそれで何とかやれたんですが、そのうち場所によつては岩石でかちかちのところに出会うわけです。こんなものもやっぱり同じノルマでやれと。こんなもの

できるわけがないということ……。ところが、できないと夜中になっても帰してくれないわけです。それで、この監督は前に石造りの家、建物を造っていたときの監督官、同じ技術将校で、中尉でしたが、これと交渉して、この部分は毎日の作業終了後、少しずつやっていくということで話がつきまして、何とか半月ぐらいで完成することができました。この道路作業は毎日先へ先へと進んでいくので、宿舎が間に合わないわけです。野宿です。それで、道路わきの野原に木の小枝を切ってきて、片屋根の骨組みを造りまして、その上に小枝だとか乾草、草だとか、そういうものに乗つけて夜露をしのぐという、もちろん雨が降ったらもうそんなものは何にもならないんですが、そういう生活でした。

そこに三、四日から長くて四、五日ぐらいすると、もう先へ先へ作業が進むものですから、また新しくねぐらを造るといふようなことをやって、ずっとその年の冬まで続いたんです。食事は毎日、

分隊ごとに食糧が配給されて、それを個人にまた分配して、各人が自炊するわけです。時々雨に遭って倉庫が全部びしょぬれになって、それで着がえもない。春とはいえ、もう寒くて震えたこともたびたびありました。

それから秋になり、道路作業の移動の途中で沼があつて、だれかがこの沼には貝がいるかもしれないと言つて中に入りました。水は冷たいんですけども、中に入つてトリガイ、バカガイとも言うんでしようか、それをたくさんとつてきて腹いっぱい食べる。みんな寒いのを我慢して震えながら沼に入つて貝をとつて食べました。それをゆでて配給の塩をつけて食べるんですが、味は結構おいしいんです。ところが、翌日からひどい便秘になりました。本当に七転八倒の苦しみを味わいました。

それからまた、道路作業の途中では草原にユリが生えているわけです。もう花は散っているんですが、そのユリの根っこを掘つてゆでて食べる。

ユリの根っこというのは日本では高級料理になるんでしょうけれども、バレイシヨにちよつと似ているんですが、それよりもっとおいしかったと思っております。それからまた、アカザやタンポポなどの野草をとってきてゆでて食べるんです。これを飯ごうにとってきてゆでて、ぎゅうぎゅう押しつけてゆでたのを飯ごういっぱいにしてそれを食べるんですが、これがまずいの何のつて、ちよつとぐらい食べるのならないんですが、ただ腹を膨らすために無理やり押し込むので、吐きそうになりながらも押し込んで、ひどいものでした。そういう経験もしました。

移動の途中でコルホーズ、集団農場の部落に差しかかるとバレイシヨの収穫をしておるんですが、そのとき、掘っている前に行つて、ちよつとにやつと笑うと、バケツいっぱいジャガイモをくれるんです。これは本当の話なんです。うそみたいですが本当の話です。ロシア人というのは個人的には非常に人がいいのです。そんなわけで、この時

期は食糧には割と恵まれました。

また、大雨が降つて、食糧配給の配送のトラックが、大雨のために橋が流されまして食糧運搬ができなくなりまして、何日も食糧が届かないんです。それでもソ連の監督は、もうそこまでトラックが来ているから作業を続ける、そうしたらいっぱい食べられるからそれまで我慢して作業を続けるということだまされて、三日ぐらい本当に何も食べないで作業をしたこともありました。その後食糧も届いて、三食分ぐらいを一度に食べて腹が苦しくなつて、食べ過ぎたことを悔やんだこともありました。

そのうち十月になると雪が降り始め、雪の中の野宿が続きました。やがて十一月の三日にようやくちゃんとした収容所に到着し、野宿の旅も終わりを告げたんです。ただ、雪の中の野宿は、片屋根のねぐらの中に、野原に積んである乾草、家畜のえさなんです。それを黙っていただいできて、除雪した土の上にその草を約十センチぐらい敷い

て、その前で木の枝を燃やしてたき火をして火に当たっているとだんだん温かくなるわけです。体が温まってくると横になって寝るんですが、これが約五分から十分ぐらいすると、背中からぞくぞくして寝ておれないわけです。それで一晚中うとうとして、ほとんど寝られないという状況でありました。

それから、その収容所で伐採作業に入るのですが、これがまた大変でした。何しろ伐採などは生まれて初めてなので、要領がわかりません。軍隊では工兵だったので、初年兵のとき、「のこ」や「おの」の使い方は習いましたが、これは普通の大工道具です。伐採に使うというのは――その伐採というのも立ち木で直径一メートルぐらいあるので、普通ののこではかかりません。それで、長さが一メートル二十から一メートル五十ぐらいの二人で引くのこがあるんですが、それで立ち木を二人で切り倒すわけです。最初のうちは全然、一日かかっても半分ぐらいしか切れないんです。後でわか

ったんですが、その「のこ」は目立てもしていない、つるつるの「のこ」だったのです。そのうちだんだん要領がわかって、一日二回ぐらい目立てするようになりました。そうしたら、ようやく一本倒すのに一時間もかからない。三十分ぐらいで倒れるようになりました。そして、それを用材の場合は二メートル、それから、薪にするのは一メートルの長さに切って積むわけです。それを二人で四立方メートルがノルマだったんですが、それができるようにになりました。

ところが、できると、だんだんノルマがふえてくるんです。四立米が六立米になり、しまいには八立米まで上がりました。日本人というのは早くやって早くしまおうという気があるものですから、最初はまだ日の明るいうちにすぐできちやうわけです。それで、どんどんこれじゃあれだというこ

とで、八立米ぐらいまでになりました。
冬になると長靴、カーボンキというフェルトでできた長靴が配給になったんですが、これは一日

履いて道路を歩いていると、それこそ足の湿気で靴自体がかちかちに凍るわけです。それを一晩ペチカの上だとか、わきに置いて乾かすんです。朝履いて、朝のうちはほかほかしていいんですが、その寒い中を十分から二十分も歩くと、今度はもうその長靴が湿気でかちかちになるわけです。そうすると、もう道路がつるつるに凍っているのです。すてんすてんとひっくり返っちゃって、作業場に行くまでに疲れちゃうんです。本当に寒いというのはひどいことでした。それでも、まあノルマが達成できるようになったんですけれども、本当に伐採というのはひどい作業でした。

また、今までの収容所で電灯というものは、ナホトカに行くまで三年何カ月、全然見たことはありませんでした。伐採ですから人家もないような山の中ばかり歩いていたものだから……。それで、明かりはランプです。そのランプも灯油がないものですから、缶詰の缶を大小重ねまして、中にガソリンを入れて、穴をあけてひもを芯のかわ

りにしまして、それをランプ、明かりのかわりにするんですが、ガソリンなものですから、すずが
出て、朝起きると真っ黒になるんです。そのランプが何カ所も収容所の中に置いてあるんですが、朝起きると、みんな顔が真っ黒で、本当にお化けみたいな顔になっている。

また、その収容所も転々とあちこち動いて歩いたんですが、冬、移動すると人の住んでいない家というのは空き家で、暖房も何もしないものだから凍っているんです。柱の割れ目に氷が凍って光っているんです。それで、いくらストーブをたいても四、五日は溶けないんです。恐らく零下だったと思うんです。寒い思いをしながら我慢して寝ていたんですが、四、五日すると大体温かくなってきました。また、夏の暑いときは作業中にのどが渇くと、水はあるんですけども、日本だったらクリームソーダか何か冷たいものを飲んだらおいしいだろうなと思いました。日本に帰ってからはそんなことはすっかり忘れて、ビールの方がよ

くなってきましたが……。

その後いろいろありまして、昭和二十三年の十月二十九日に舞鶴に上陸して、八十過ぎの今日まで生き長らえています。帰ってきてしばらく、何十年も、夢を見るんです。せっかくソ連から帰ってきて日本に到着して、舞鶴に上陸した途端にソ連の警戒兵が出てきて、「おまえ、もう一回ソ連に行け」という夢を本当によく見ました。二十一年ぐらいは時々見ておりました。自分の体験としてもそれほどひどかったんでしょね。

抑留

埼玉県 菊田 鎮 男

戦前の私が特に頭の中に記憶していることが六
点あるんですね。その六点だけ簡単にちよつとお
話します。

まず第一点は何かといいますと、私は三重県の
部隊に入りましたので、名古屋の駅から大陸へ渡
ったわけなんです。名古屋の駅から名古屋城を見
ますと、昔は丸見えに見えたんです。今は何も見
えません。これが名古屋城は私の見納めである
ということ、まずこれが一点。幸いまた見られま
した。

それから次に、朝鮮からずっと入っていきま
すと、山海関というところがございます。山海関は
両方とも山になっていまして、その下を列車が通
るわけです。そこを通るときはもう日本軍は全部